

長期母子分離された児をもつ家族への援助について

2階西病棟

○岡本須美子 松高早紀江 成瀬 桂子
川上 美穂 下村 愛子 小原美智子
谷脇 文子

I はじめに

母子の愛着形成過程における、母子分離は、母性行動を障害する一因と考えられている。特に、未熟児の長期母子分離は母親の母性喪失を招き、被虐待児症候群などが数多く報告されている。それ故に、NICUにおける母子関係確立のための母親を含む家族への援助の重要性が、指摘されている。

今回、母親が長期安静を余儀なくされ、児と早期接触ができず、この間、夫を介して児と間接的接触が行われ、その後も母子関係の確立に長期間を要した症例を経験した。本症例を通して、早期接触困難な場合の、母子関係確立のための両親への援助のあり方を検討したので報告する。

II 事例紹介

表1 母親紹介

氏 名：○山○子
年 齢：34才
職 業：主婦
家族構成：夫38才（会社員）長女8才（健児）
性 格：口数が少ない 感情表出が少ない 我慢強い
既往症：19才 虫垂炎手術 20才 敗血症
分娩歴：昭和53年に前置胎盤・骨盤位にて帝王切開し女兒出産
今回の妊娠に対して：希望妊娠
今回妊娠歴：SS23W 前置胎盤にて某医院より当院紹介される。
SS23W3D 腹式帝王切開術施行

母親は34才の経産婦で、8年前、前置胎盤で帝王切開を受けている。今回も前置胎盤で、妊娠29週に再び帝王切開をした。そして、出産後、貧血及び肝機能低下のため、長期安静が指示された。出産後18日目に児と初回面会でき、26日目に母親のみ退院する。なお、今回の

妊娠は希望妊娠であった。(表2)

表2 児紹介

生下時体重：1,321 g 女児 在胎週数：29週3日
Apgar 8点, 5分後10点
診 断 名：極小未熟児, IRDS (特発性呼吸窮迫症候群)
BPD (肺異形成症), 高ビリルビン血症
両側気胸

児は, 1,321 g の極小未熟児で, 特発性呼吸窮迫症候群, 気胸, 肺異形成症を併発し, 長期人工呼吸管理を行い, 生後212日目に軽快退院した。

Ⅲ 看 護

看護は, 第Ⅰ期として, 出産から児との初回面会までと, それ以後児の退院までの第Ⅱ期とに分けて展開した。(表3)

表3 第Ⅰ期の看護

- 目標1. 父と児の良好な親子関係の確立
2. 父親の役割促進 (特に母親に対して)
- 看護計画
1. 父親と児の早期接触
 2. 父親の早期保育参加
 3. 父親を介して母親に対する児に関する情報伝達
 4. 病室における母親と児の写真対面
 5. 母親と児の受け持ち看護婦の連携
 6. 母乳保育の参加 (搾母乳の指導)

第Ⅰ期では, 母親が直接児と面会できないため, 父と子の良好な親子関係の確立を図ることと, 母親に対しての父親の役割促進の2つを目標にし, 以下の計画を実践した。

まず, 父親が父親・夫としての役割りを自覚し, その役割りを果たせるようにした。父親と児の早期接触・保育参加を働きかけ, その感想などを母親に伝えてもらったり, 児との写真面会を勧めた。また, 母親と児の受持看護婦が連携し, 児の情報を母親に伝えて, 安心感を持たせ, 母親が持つ児へのイメージの強化に努めた。

これらのことから, 父親と児との良好な親子関係が成立し, 父親と私達の間でも, 早期に信頼関係を結ぶことができた。また, 母親は児を受け入れ, 愛着を示し, 過度な不安状況に

も陥らず、児との対面を持つことができた。しかし、初回面会時、母親は児の状態を見てショックを受け、その後も児を恐れる言動があった。(表4)

表4 ショックによる母親の行動

1. 児に触れたがらない。
2. 保育参加を拒否する。
3. 一歩距離をおいて児を見る。
4. 協調的な反応がない。
5. 児についての質問をしない。

そこで、私達は、母親がこのショックから立ち直り、児を受容し、良好な母子関係が確立できることを第Ⅱ期の目標に上げ、以下の計画を立て実践した。(表5)

表5 第Ⅱ期の看護

目標1. ショックから立ち直り、児を受容でき母子関係が確立する

看護計画

1. 母親と児のタッチング促進。
2. 両親そろっての面会と保育参加。
3. 面会ノートの活用。
4. 雰囲気づくり。
5. 状況に応じた状態説明。
6. 両親との信頼関係の成立と強化。
7. 母親と児担当看護婦の連携。
8. 父親の役割促進と強化。
父親に対するスタッフのサポート。
父親による母親へのサポート。

まず、母親に対しては、支持的、受容的態度で接し、母親が児をできるだけ早く受容できるように努めた。そして、母親と児とのタッチングを勧め、面会ノートを活用し、言葉にできない不安や直接聞けない質問などを書いてもらうように働きかけ、母親の感情表出に努めた。また、面会時には、母親が話しやすい雰囲気づくりをし、どんな些細な事でも看護婦に気軽に相談できるように努めた。児の状態に変化があった時は、すぐに、医師からできるだけわかりやすく両親に説明をしてもらうように協力を得、不安の除去、看護スタッフとの信頼関係の成立・強化を図った。母親の受持看護婦と児の受持看護婦は、連絡を密にして、特に母親の児に関する心理面を中心に情報交換を行った。母親の退院後は、父親から母親につ

いての情報収集をし、母親の心理状態の理解に努めた。

IV 考 察

本症例は、今まで私達が経験した多くの症例より、母子関係の確立に長期間を要した。それは、母親と児が18日間対面ができなかったこと。また、その間に母親が予期していたより、児の状態が重症であると判断したこと。そのことから母親が初回面会時に受けたショックが大きかったからだと思われる。というのは、この母親は、第1子出産後、2回の自然流産を経験し、今回待望の第2子であった。しかし、その児を重症に生んでしまったと、児に対する罪悪感と自尊心の喪失がより強く起こり、母親は児を受容するのに時間を要したと思われる。しかし、私達の母親に対する認識不足から、最初は母親の受けたショックを正確に評価できず、愛着形成への援助は不十分であったと思われる。私達は、母親の背景・性格などを十分把握し、もっと鋭い洞察力を持ち、状況判断を的確にしなければならないと反省させられた。

その後、母親の行動からショックの大きさに気づき、援助を強化したが、この母親とは、出産前、その性格から信頼関係を築くのに時間を要しており、すぐにはその効果を期待することは困難と思われた。時には拒否的態度がみられることもあったが、あせらず、根気よく援助を続けた結果、信頼関係が成立し、母子関係も良好に発展させることができたと思われる。

私達は、通常、母親の初回面会時には父親を同伴させ、母親を支え、児を受容できるように、父親の協力を得るようにしている。特に今回のような場合、父親の存在は大きく、児にとっての父と母、母親にとっての夫という三重の役割りを果たさねばならず、しかも、母と子を結ぶ重要な存在でもある。私達は、父親を看護計画に参加させたが、この父親は、その役割りを充分果たしたと思う。児の出生から退院まで、ほぼ毎日面会に来て、良き父親であると同時に、夫として妻を支え、児をとりまく家族の重要な要であったと思われる。

V おわりに

今回、私達は、母親が長期間児と面会できない場合、父親が大きな役割りを持つことを再認識した。そして、たとえ母親の愛着形成が遅延しても、父親への援助が良好で良い親子関係が得られたならば、母と子の関係が確立して行くことを、本症例を通して経験した。

この経験を生かし、今後は、父・母両者への働きかけの強化と、その援助のあり方について考えて行きたいと思う。

参考文献

- 岡部恵子：母と子のきずなの出発点—母親の自立を支える者としての自覚—，助産婦雑誌，VoL 38，No 6，p 10～24，医学書院，1984
- 前川喜平：新生児と母子相互作用，助産婦雑誌，VoL 38，No 6，p 25～31，医学書院，1984
- 村田恵子：未熟児の母子相互作用と看護援助，助産婦雑誌，VoL 38，No 6，p 33～38，医学書院，1984
- Klaus, M.H., Kennell, J.H., 竹内 徹他訳：母と子のきずな—母子関係の原点を探る—，医学書院，1981
- 小嶋謙四郎：面接とカウンセリングの基礎—母子保健指導と母子関係論—，周産期医学，VoL 10，No 8，p 23～26，東京医学社，1980
- 柴田眞理子他：母子関係の評価とそれにかかわる要因，母性衛生，VoL 27，No 1，p 47～53，日本母性衛生学会，1986
- 久留良子他：前置胎盤の看護，周産期医学，VoL 12，No12，p 39～44，東京医学社，1982
- 布施養善：前置胎盤から出生した新生児のケア—，周産期医学，VoL 12，No12，p 69～73，東京医学社，1982
- 柴田芳枝：臨床からみた「母性」，助産婦雑誌，VoL 41，No 1，医学書院，1987
- 横尾京子：看護の場で“看護過程”を使いこなすために—NICUにおける家族へのケア計画展開を通して—，看護の場に生かす看護過程，看護の場に生かす看護過程編纂委員会編，1985
- 竹内徹他：親と子のきずな，医学書院，1985
- ダイアンK 他編，小玉香津子他訳：女性とストレス—看護の視点から—，日本看護協会出版会，1986
- 新道幸恵他：妊産褥婦の母性意識の形成とその援助—母親役割取得過程との関連において—，助産婦雑誌，VoL 41，No 1，医学書院，1987

(昭和62年2月5日 高松市にて開催の第20回四国母性衛生学会で発表)